

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆【共同研究報告2】◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

LGBTをはじめとする性的少数者についての  
アクション・リサーチを通じた包摂的な大学共同体の構築

研究期間 2017年度

# 敬和学園大学LGBT人権研究グループKeiwa-sign の活動の教育的意義 ——2017年度研究活動より——

虎岩朋加、Andrew Steltzer、池田しのぶ

## はじめに

本報告は、敬和学園大学を、LGBT 当事者への偏見や差別をなくし、LGBT 当事者が過ごしやすい学びの環境にすることを目的とした敬和学園大学 LGBT 人権研究グループ Keiwa-sign の活動のプロセスのなかで、グループのメンバーがどのような経験を得て、どのような意識変容を遂げたのか、そして、かれらの活動が、大学環境にどのような影響を与えたのかを明らかにすることを目的としている。

2016 年に一橋大学で見られたアウティング事件（同大学法科大学院において同性の同級生に恋愛感情を告白したが告白相手によるアウティング（セクシュアリティの同意のない暴露）をきっかけとして、当該学生が投身自殺を図って転落死した事件）などに鑑みて、当事者の若者たちが恋愛や将来の見通しに関する話題に頻繁かつ無防備にさらされる年代にある大学において、LGBT などのセクシュアル・マイノリティを考慮に入れた教育環境整備は喫緊の課題である<sup>1)</sup>。

敬和学園大学の LGBT 人権研究グループ Keiwa-sign は、2015 年度に結成され、2016 年度には上廣倫理財団の助成を得て月に 2～4 回の勉強会、教職員の間での LGBT についての意識調査、教職員を対象とした研修会、教職員を対象としたニュースの発行、学会での研究発表、公開セミナー、学生の間での LGBT についての意識調査、学園祭での展示による啓発活動、学生意識調査結果の報告会、就職懇談会での企業を相手にした活動報告を実施した。また、学内の男女で分けられていたトイレのうち三ヶ所を多目的トイレとし、誰もが利用できるものとした。

以上の活動は、アクション・リサーチとして実施されたものである。アクション・リサーチの手法は、リサーチが行われる現場との協動的な関係性によってすすめられる課題解決手法で、とくに労働生活の改善や、成人教育、社会教育研究の方法として採用されてきた。Peter Reason と Hilary Bradbury は、アクション・リサーチを次のように定義している。「アクション・リサーチとは、価値ある人間的目的を追求する中で実践的な知を生み出していくことと関わる参加のプロセスである。他者とともに参加し、人々を圧迫する諸問題の実践的な解決の追求において、あるいはもっと一般的に言えば、個々人やかれらのコミュ

ニティの繁栄の追求において、行為と反省、理論と実践とを統合することを、アクション・リサーチは求める」<sup>2)</sup>。アクション・リサーチは、このように、参加を通じて、認識され、共有され、実現される経験のプロセスにより、参加者や共同体に道徳的変容をもたらす手法として知られる。大学構成員であり LGBT 当事者も含む学生と教職員によるアクション・リサーチの手法を採用し、大学を差別のない環境にすることの実現について、ともに考え、感じ、行動することを通じて、アクション・リサーチ参加者の差別や多様性に対する感受性を養い、かれらの道徳的成長を企図するとともに、かれらの活動による他の大学構成員への直接的間接的影響によって、大学共同体全体をより包摂的（インクルーシブ）にすることが、本研究のねらいである。

2017 年度には、敬和学園大学人文社会科学研究所共同研究助成を得て、グループメンバーの道徳的成長、および大学環境の変容を企図する活動を継続した。本報告では、まず、2017 年度の活動の概要を示す。次に、2017 年度の主な活動として、公開研修会とチャペル・アッセンブリー・アワーでの Keiwa-sign メンバーによる報告を取り上げ、Keiwa-sign の活動が大学環境にどのような影響を及ぼしたのか考えてみる。そして、Keiwa-sign メンバーによる 2017 年度の活動についての振り返りに基づき、Keiwa-sign のメンバーがどのような経験を得たとかれらが認識しているかについて、分析する。

2016 年度の活動を終えた時、Keiwa-sign は活動から明らかになった二つの課題を示した。一つ目は、どの程度グループを外部に開いていくのかという課題であり、二つ目は、グループに内在する当事者のセラピー的志向性と、社会的諸条件や諸状況を変えようとする変革的志向性との葛藤という課題であった。メンバーたちはそれぞれ、セクシュアリティや性自認に限らず、さまざまな意味で、マイノリティへの志向性を持っている。外部に開いていくアウトリーチ活動と、マイノリティとして日々の生活の中で経験するさまざまな困難や痛みに取り組み、自己を癒し肯定していく活動とのバランスをうまくとれるかどうかという大きな課題であった。

本報告では、2017 年度、他機関や他グループとの協力、アライ（当事者ではないが当事者を支援しよう応援しようとすることを公にしている人たち）を増やす活動等を積極的におこない、意識的に、外部に自らを開いていった結果、大学環境への影響の観点から、Keiwa-sign の活動が、大学の構成員のセクシュアル・マイノリティに対する意識を高めることに貢献していることを示す。また、当事者としてのセラピー的志向性は、環境へのアウトリーチ活動を通して昇華され、メンバーの道徳的成長を促したことを示す。メンバーたちは、グループ活動に関するアンケートの中で、自己肯定感、自己自身の受容を経験したことや、セクシュアル・マイノリティの事柄は他人事ではなく自分事であることや、みずからの共同体の成員としての社会的責任を認識したことなどを報告している。以上のよ

うに、本報告は、活動から明らかになった課題に向き合い取り組むというアクション・リサーチの手法をとおして、Keiwa-signの活動が、環境への肯定的影響をもたらしたことや、メンバーの道徳的変容といった教育的な意義を得たことを示す。

## 1 2017年度のKeiwa-signの活動

2017年度は学生団体紹介でのKeiwa-signの活動紹介および新規メンバーの勧誘から始まった。勧誘による効果が見られ、新規メンバーが数名加わることとなった。これら新規メンバーの歓迎会の意味も込めて4月には映画上映会を開催した。また、前期には、本年度1年生を対象とした「敬和学園大学におけるLGBTの教育・職場環境アンケート（学生用）2017」を実施した。本調査実施には、キリスト教学ご担当の下田尾治郎先生のご協力を得た。

後期の主な活動としては、敬和祭での展示、Keiwa-sign公開研修会、新発田市の人権フェスティバルへの出展、チャペル・アッセンブリ・アワーでの調査報告が挙げられる。また年間を通して、月に概ね2回ミーティングを行なった。ミーティングでは、LGBTに関する文献の講読、企画に関する打ち合わせや準備などを行なった。Twitterアカウントを開設したことも本年度の大きな出来事の一つである。

本年度の活動の特徴を示してみれば、以下の三つに集約することができる。一つ目は、本年度から参加した新規メンバーが、学びながら、また、知識を獲得しながらも、周囲に影響を与え、周囲を変えて行こうとするアウトリーチの活動に従事してきたこと、二つ目は、アライを増やすことに焦点を当てたこと、三つ目は、他機関や他グループとの協力・連携を行ったことである。

一つ目について言えば、2016年度は特に、グループメンバーである当事者の学生が自分自身を理解することができるような活動（主に知識を得て、自己のアイデンティティの模索を図ることのできるような活動）に主眼をおいた。2017年度は、より積極的に外側に出かけて、周囲に影響を与えようとする点が強調されたことにより、グループの性格に少なからぬ変化をもたらされた。

二つ目は、Keiwa-signは、当事者のみが集まる当事者のためだけの自己援助グループというよりも、当事者と寄り添い、当事者のために活動するアライの集団であるということ、そして、アライを増やすことを活動の主な目的として掲げているということにより鮮明にしたことと関わる。もちろん、一つ目の特徴とも関連する。大学祭である敬和祭では展示のテーマとして、We are alliesを掲げた。また、アライを増やす仕掛けとして、缶バッジを作成し、販売した。缶バッジは二つセットで販売し、LGBTの基礎知識やアライとは何かが書かれているカードを缶バッジの袋に同封した。缶バッジの一つは自分に、もう

一つは友人や家族にあげるということを促し、アライを増やすという活動にバッジの購入を通してどんな人でも参加できるということを実現する仕掛けであった。

三つ目に関して言えば、新潟大学セクマイ（セクシュアル・マイノリティ）グループ「カラリカ」との交流会や情報交換会などを定期的に行なっていると同時に、新潟県女性財団とも主催イベントに互いに参加しあい、知識を深める活動を行なった。また、新発田市主催の人権フェスティバルへの参加も他機関との協力としてあげられるだろう。公開研修会には、特定非営利活動法人 ReBit に講師として来てもらったが、これも他機関との連携としてあげられる。

外部へと向けられたアウトリーチ活動は、環境への影響という観点から、大きな成果を得た。アウトリーチ活動により、メンバーを増やすことができたということ、また、次項以降で言及するが、メンバー以外の学生たちに気づきを与えたり、セクシュアリティに関する意識を確実に変えたりしていつていることは、成果の表れだと思われる。また、メンバー自体の経験ということに関して言えば、Keiwa-sign の活動は、かれらにセクシュアリティが決して自明なことではないと考えるきっかけを与え続けている。

以下に年間活動のリストを示す。

## 2017年度年間活動

### 2017年

- 4月10日（月）学生団体紹介でのKeiwa-signの紹介
- 4月28日（金）映画上映会
- 5月11日（木）ミーティング
- 5月26日（金）ミーティング
- 6月 8日（木）ミーティング
- 6月23日（金）ミーティング
- 7月 5日、 7日（水、金）「敬和学園大学におけるLGBTの教育・職場環境アンケート（学生用）2017」実施
- 7月 6日（木）ミーティング
- 7月21日（金）ミーティング
- 7月24日（月）Keiwa-sign News no.1 発行
- 8月28日（月）新潟大学セクマイサークル「カラリカ」との交流会
- 10月 5日（木）ミーティング
- 10月13日（金）ミーティング
- 10月19日（木）ミーティング

- 10月25日（水）1年生メンバーを対象としたLGBT基礎知識講義
- 10月28日、29日（土、日）敬和祭での展示「We are allies!」
- 11月 9日（木）ミーティング 新潟県女性財団からの参加
- 11月16日（木）ミーティング
- 11月18日（土）Keiwa-sign公開研修会「LGBTってなんだろう？—互いの違いを受けい  
れあえる社会を目指して—」
- 11月23日（木）第1回『LGBTと教育フォーラム』 in 金沢への参加と研修
- 11月26日（日）新発田市人権フェスティバル出店
- 11月30日（木）ミーティング
- 12月 7日（木）ミーティング
- 12月15日（金）Keiwa-sign News no.2 発行
- 12月21日（木）ミーティング
- 2018年
- 1月11日（木）ミーティング
- 1月18日（木）ミーティング
- 1月19日（金）チャペル・アッセンブリ・アワーでの調査報告
- 2月 1日（木）ミーティング
- 2月 2日（金）Keiwa-sign News no.3 発行

## 2 公開研修会と学生の意識

2017年11月18日（土）に、Keiwa-sign 公開研修会「LGBTってなんだろう？—互いの違いを受けいれあえる社会を目指して—」を開催した。基本的には、Keiwa-signのメンバーの研修を主眼とした研修会であった。新規メンバーにとっては、Keiwa-signの活動理念である「大学を差別のない過ごしやすい環境にすること」とはどんなことなのか、また具体的にメンバーとして何ができるのかを考えてもらう機会とした。また、既存のメンバーにとっては、セクシュアル・マイノリティに関する自分たちの知識や情報を更新すると同時に、セクシュアル・マイノリティ当事者との連携をさらに強化する機会とした。他方で、このような研修会の主催者として事業を運営することによって、共同体から差別をなくし、多様な人がよりよくいられるあり方を模索するという社会を変えるための活動に、自ら行動し関わっているという意識をKeiwa-signのメンバーがもつようになることを期待した。

公開研修会にしたのには理由がある。もちろん「大学を差別のない過ごしやすい環境にすること」という目的の実現に寄与するということはある。それだけでなく、特に、教職課程や社会福祉士養成課程を履修する学生に参加を促したことによって、人を育て、人を

ケアするというかれらの将来の仕事に欠かすことのできない多様な人のあり方に関する知識を得てもらうことを目論んだ。さらに、地域の人にも研修会を公開する事で、地域への知識還元も目指した。本件については新潟日報に告知記事を掲載してもらった。またTwitterを通して告知をした。

この公開研修会では、特定非営利活動法人 ReBit に講師の派遣を依頼した。ReBit は LGBT を含めた全ての子どもが、ありのままの自分で大人になれる社会を目指す NPO 法人である。団体名には「少しずつ (Bit)」を「何度でも (Re)」繰り返すことにより社会が前進してほしい、という願いが込められ、LGBT の人も LGBT でない人も、大学生や 20 代の若者、約 300 名が参加しているということである<sup>3)</sup>。ReBit はセクシュアル・マイノリティ当事者を講師として学校等に派遣する出張授業や企業の研修の実施のほか、学校で教師が利用することのできる LGBT に関する教材の開発、セクシュアル・マイノリティ当事者自身が作り上げる LGBT 成人式の実施、LGBT に向けた就活支援を行なっている<sup>4)</sup>。

当日は、当事者 2 名が講師として来学した。一人は FtX トランスジェンダー<sup>5)</sup>、もう一人は男性同性愛者という自己紹介があった。研修会では、まず、セクシュアリティについての基本的な知識を学んだ後、講師それぞれが、セクシュアル・マイノリティとしてどのように自分自身を受け入れ、どのようにこれまでの人生を歩んできたかについて話した。その話を受けて、セクシュアル・マイノリティがどのような場面でどのような困難を経験しているのか講義があった。最後に、参加者全員で、「今日からできること」について話し合った。

公開研修会には、合計で 26 名の参加者があった。内訳は、教職課程を履修する学生 14 名のほか、一般 5 人、Keiwa-sign メンバー 7 名（教職課程学生 2 名を除く）である。残念ながら社会福祉士養成課程を履修する学生の参加はなかった。

参加者からは、セクシュアル・マイノリティとして生きることの困難を知ったことについて、「今の日本の社会は彼らにとって安心して生活を送ることが少し困難なのだを知った」とのコメントがあった<sup>6)</sup>。統計上 13 人に 1 名は LGBT 当事者であるという紹介があったことから<sup>7)</sup> (2015 年電通による 20 代から 50 代の約 7 万人を対象とするインターネット調査)、これまで生きてきた中で当事者に出会っていたのかもしれないと事実を感じた学生もいた。また、セクシュアル・マイノリティ当事者の子どもたちの多くが、いじめや暴力を受けたことがあること、自殺念慮を抱いたことがあること、また、実際に自傷・自殺を試みたことがあるという事実を知って<sup>8)</sup>、いずれ教育者になる者としての心構えや行動についてコメントする学生がいた。例えば、「私たちのような教育者を目指す学生が (LGBT の) 知識を持つように勉強することが大切だと思います」とか「学校教育で LGBT について学ぶ機会が増えることが、理解する人々を増やしていくと思いますし、またその教育を行う一人にもなりたいと感じました」といったコメントである。「今

日からできることをみんなで考えることが出来たのは非常に印象的でした。(中略) いか LGBT という言葉そのものがなくなるような世の中になって欲しいと感じ、自分もそのための一人でありたいと思います」といずれ教員になる者としての自分の使命を明記した学生もあった。

さらに、一歩進んで具体的に教員としての行動を考察した学生もいた。「私は高校の教師を目指すなか、自分が担当する科目を専門的に勉強するだけではなく、LGBT のことで悩みを抱えている生徒の接し方についても、深く考えていこうと思いました。(中略) ReBit さんの方法を参考にしていきたいと思いました。例えば、生徒の一人に LGBT に関する悩みを打ち明けられた時、誰も使っていない安心して話せる環境に移動して、話してくれた理由や悩みをしっかりと受け止め、生徒と一緒に悩みを解決することや、その生徒の助けになるビデオや番組などをできる限り伝えていくといったように、ReBit さんが教えてくれたことを、色々考えていきたいなと思いました。」

教職課程を履修する学生によるこうした感想は、今後、実際にかれらが教師となった時に、LGBT などを含むマイノリティに対する差別をなくそうとする働きかけに参加していく可能性を示唆するものである。差別をなくす働きかけ、あらゆる人々が過ごしやすい社会環境を作ろうとする働きかけの連鎖に、かれらを巻き込むきっかけを作ったと言える。

また Keiwa-sign メンバーによる以下のコメントにも注目したい。「改めて自己について考えることとなりました。(中略) 自認している性を見つめ直す貴重な機会となり、LGBT の方達に少しだけ寄り添えたような、痛みを分かち合えたような、そんな機会となり、とても大切な時を過ごすことができました」。本研修会が、Keiwa-sign メンバーにとって、Keiwa-sign の活動の本質を理解し、また感受する機会となったと言える。すなわち、性の多様性やセクシュアリティの多様性を、活動の中で常に確認してきたが、それが人ごとではないことが理解されたと言える。また、「改めて自己について考えることになった」ということ、そして「痛みを分かち合えた」ということの意味は大きい。性に関わる社会制度が個々人の認識を規定していると同時に、個々人の認識は性に関わる社会制度を生み出している。個々人の認識と社会制度の以上のような相互関係の中で、自分自身のあり方が定義されていること、また、その定義に基づき自分自身についての見方や行動が生み出されていること、さらに社会制度と個々人の認識が現実を強固に作り上げ、「痛み」が個々人にもたらされることがあることへの気づきが、大変シンプルに表現されている。この気づきは、Keiwa-sign の活動への参加者の道徳的変容の可能性を示唆するものと言えるだろう。



### 3 報告会の意義

2018年1月19日（金）には、Keiwa-signは、チャペル・アッセンブリ・アワーの時間をかりて、2017年7月に行った1年生対象のLGBTに関する意識調査の報告会を行った。報告会では、セクシュアリティの多様性について話したあと、意識調査の結果の一部を報告した。大学内でのLGBTに関する差別的な言動を見聞きしたことのある1年生が2割程度いるということや同性愛や性別違和について本人の選択であるとか精神的な病気であると考えている人が少なからずいるということについて報告した<sup>9)</sup>。

アッセンブリー・アワーでは、報告会についてアンケートを実施した。回収したアンケート77人分のうち、各設問については以下のような回答を得た。まず、報告会についてだが、「非常に満足した」26人、「満足した」39人、「どちらともいえない」8人、「不満だった」1人、「非常に不満だった」0人であった。報告会に満足した参加者が大半を占めていたことがわかる。次に、「LGBTは、自分の周囲にもいる可能性があると思いませんか？」という問いに対して、「はい」67人、「いいえ」5人、「その他」4人であった。その他についての記述では「わからない」としたのが3人、「前からいると思っていた」が1人であった。今回の報告では、セクシュアリティの多様性や、性のあり方の多様性を示したが、その主眼は、セクシュアル・マイノリティは決してテレビの中だけの存在でないこと、私たちの中にも存在することを強調することであった。その目的はある程度達成されたと言える。

次に「LGBTや性の多様性について知ることは、大学を差別のない環境にすることに繋がりますか？」という質問に対しては、「とてもそう思う」50人、「ややそう思う」17人、「どちらともいえない」7人、「あまりそう思わない」1人、「全くそう思わない」1人であった。本項目は、Keiwa-signの活動の要となる質問である。報告会では、セクシュアル・マイノリティについての偏見をなくす第一歩は「知る」ことであることを明示した。67人が、知ることが差別のない環境にすることにつながると回答したことは、Keiwa-signの活動が着実に大学環境に影響を及ぼしていることを示していると言えるだろう。

「LGBTや性の多様性について知ることは、その他の多様性についても考えることに繋がりますか？」という質問では、「とてもそう思う」42人、「ややそう思う」26人、「どちらともいえない」8人、「あまりそう思わない」0人、「全くそう思わない」0人であった。また、「LGBTや性の多様性について知ることは、自分とは異なる他者を理解することに繋がりますか？」には、「とてもそう思う」49人、「ややそう思う」17人、「どちらともいえない」7人、「あまりそう思わない」2人、「全くそう思わない」0人であった。前者の質問については、社会自体がさまざまな違いを含みこんでいるという認識と関連するが、LGBTに関するKeiwa-signの活動（つまりLGBTや性の多様性について知るこ

とを促す活動)が、社会全体をより包摂的なものにするということに、ある程度寄与するだろうことを、過半数のアンケート回答者が認めていることに注目したい。他方、後者の質問については、異なる他者のニーズや状況を感じることとかかわるが、これについても肯定的な回答を高い割合で得たことを記したい。

本報告の準備段階では、メンバーによる活発な議論が行われたが、その中では、多様性を示すと同時に、人に誤解を与えたり傷つけたりしないような言葉に配慮することに重点がおかれた。準備段階でのこうしたやりとり自体も、活動参加者の省察や、問題状況の認識をより精緻にすること、それらに基づいて実践的な知を創造することに繋がっただろうと思われる。これについては、メンバーに対する本年度の活動についてのアンケートをもとに考察したい。

## 4 メンバーを対象とした本年度の活動振り返りアンケートの内容と分析

### (1) 活動参加の理由

活動への参加を通じた Keiwa-sign メンバーの道徳的成長という観点から、アンケートを見ていきたい。アンケートに記述された内容をそのまま引用する。まずは、「Keiwa-sign に参加したきっかけを教えてください」という質問に対して、新規メンバーの多くが、ほかの人の誘いで参加したことが示された。以下の回答がそうである。「メンバーに誘われ参加しました」、「先輩に誘われて」、「入学してまもなくできたお友達が3人入るなら、じゃあ私も入りました」というのがそうである。関心がなければもちろん参加しないだろうが、むしろ、他者の影響が前面に表現されている。こうした参加者がどのような変容を遂げたのか確認することは、重要である。

セクシュアル・マイノリティは人ごとではないという観点から関心を持った参加者もいる。例えば、「元々、このサークルに興味があった」、「元々 LGBT について興味があった。(中略) 周りで「ホモ」を嘲笑っている人が多くて少しでもそういう偏見や態度を考えてくれる人を増やしていきたい、そのためには私もたくさん学ばなければならないと思ったから」、「LGBT というテーマが自分と無関係ではないとずっと感じていたからです。わたし自身、LGBT とはちがう場面でマイノリティであることを実感することがあったり、自分のセクシャリティについて疑問を持ったりしていました」などである。自分自身の性的指向への疑問や友人にセクシュアル・マイノリティがいることが、Keiwa-sign に参加することへと向かわせたことがうかがえる。

他方、LGBT について知識として身に付けたいとした参加者もいる。「将来、海外で働きたいと考えていて、海外では LGBT という言葉が浸透しているのを知り、知識として身につけておきたいと思ったから」というものだ。グローバルな視点から見たとき、

LGBT やセクシュアル・マイノリティは重要なイシューとなることは言うまでもない。性自認や性的指向を公にしている人々が多い国や、結婚制度が日本とは異なる国々があったり、また、性的指向が異なることで犯罪となる国々もあつたりする。そうした環境にある時に、「知らないこと」は大きな問題を自己にも他者にも引き起こしうる。そのような自覚があったことをうかがわせる回答である。

また、Keiwa-sign の活動をきっかけにして、参加を決めた参加者もいる。「敬和祭で Keiwa-sign のところにお邪魔し、ここで学んでいることをきちんと理解したいと思ったから」というものである。Keiwa-sign による大学環境に影響をおよぼそうとする意図への応答があったということがわかる。

## (2) 大学や教職員への影響についての認識

Keiwa-sign の活動の大学や学生教職員への影響をどのように認識しているかについては、まず、LGBT という言葉やその意味についての認知度が上がったのではという回答が比較的多く見られた。「LGBT という言葉やセクシャルマイノリティーについて少しでも多くの方に知ってもらえることができましたと思います。敬和祭で、多くの方にブースに来ていただいたことや、廊下にレインボーツリーを貼ったり呼び込みをしたりしたことで LGBT という言葉の認知度が上がったように感じたからです」とか、「発表やニュースレターを通して LGBT について考えるきっかけになったと思う」、「LGBT についてどう考えてくれたのかその人次第だが、敬和祭や CAH (注・チャペル・アッセンブリー・アワーのこと) の発表を通して少しでも多くの方がセクシュアル・マイノリティについて、また自分たちがアライになることを考えてくれたと思っている」というような意見である。

Keiwa-sign の存在を知ってもらったことを強調する意見もあった。「今年は、学園祭と ReBit さんの講演を通じて、sign の活動を多くの方に知ってもらえたと思います。多くの学生が sign や LGBT について知る機会が今年度の活動ではありました。このような公開授業などが多いと、主に何を行っているかをメンバー以外の学生や教職員も知ることが出来るので、来年度も行えたらいいと思います」というような意見である。また、存在の強調という観点と関連して、Keiwa-sign が大学にあるということが、当事者へのメッセージともなると認識している参加者もいる。「LGBT についての知識が、知られたと思います。大勢の人が集まる場所での発表があり、当事者の方にも、私達がいるという事を伝えられたのは大きい意味があると感じました」などがそうである。当事者が当然のことだが学内にもいるということを知っていることがわかる。

アウトリーチ活動の帰結として、日常の中でセクシュアル・マイノリティについて考えたり話したりする機会が増えていることを、参加者自身が認識していることが示された。

例えば、「意識調査や文化祭での展示など目立つ活動もあって、私たちの活動と LGBT に関する情報がたくさんの人の目に触れた年だったなと思う。友人とセクシュアル・マイノリティについて話したり、彼らにとって社会は今どのような環境であるか議論したりする機会が昨年よりも格段に増えた」という意見である。

自己についての認識の変化や拡大を指摘する意見もあった。「アッセンブリー・アワーを使ったことで、そこに参加した人々の視野が広がったと思います。私がそうだったからです」というものである。先の「当事者の方にも、私達がいるということを伝えられた」という意見とともに、Keiwa-sign のメンバーが、差別や偏見についての意識を、具体的な活動を通して、高めていっていることがわかる。

さらに、Keiwa-sign の活動を、単なる学生団体活動としてではなく、社会運動として認識し、Keiwa-sign の活動が、学内外での社会運動への関心を高めていることを指摘する意見もあった。「Keiwa-sign は昨年 10 月から公式ツイッターを開設し、活動の報告やイベント参加の告知をしています。ツイッターを始めることで、Keiwa-sign に参加していない学生のあいだにも、LGBT というテーマについて考えるきっかけが生まれる機会があったと思います。自分の性や社会問題について考える学生が少なからずいること、そういった学生のなかに Keiwa-sign の活動に親近感を覚えているひとがいることが、ツイッター上のやりとりから感じられました。活動に参加していない学生からの積極的な思いを知ることができたのは、Keiwa-sign が大学内だけではなく、SNS という場所に進出したからだと思いました」。ここでは SNS などの利用を通して、Keiwa-sign が、社会に向けてメッセージを発していること、自らが関わる共同体をよりよくしていこうとする社会運動に従事していることを明確にしたことの重要性が指摘されている。

### (3) 自分への影響

自分に対する影響としては、知識を増やしたり、深めたりすることができたとする意見が大変多い。「LGBT に関する知識もそうですが、自分の性についても深く理解することができました」、「自分の無知さに気がつくことができました。以前知らなかったこと、知ろうともしなかったことをたくさん知ることができました。性的マイノリティの方々に対する態度や思いが変わったからです。」

自分自身の行動や意識の変化に気づいた参加者もいる。「性別を気にしなくなったと思います。男の子だから、女の子だから これをして当たり前という考えがなくなったので、友人や家族にありがとうと言う機会が増えたかなと思います」、「言葉遣いや他人と接するときの態度に気を付けるようになった。それらのことで傷ついている人がいるとわかったから」、「昨年は自分の知識の浅さに気づいてたくさん情報を集めたりメンバーと勉強した

りし、今年はそこで得たものをもっと自分の外に発信しようと思えて、実際に行動に移せた」などの回答である。

また、自己肯定につながったという意見もある。「勉強会を通して様々な人が生きていることを実感し、また私は今の私のままでいいんだという安心感も得た」、「2017年度は、交流を心から楽しめるようになった年であると思います。(中略) セクシュアル・マイノリティ同士の共感できる話題などを通して、一人ではないという安心と、頑張ろうという気持ちが湧いてきました」。

他方、アウトリーチ活動を行なっていく上で、つまり、外に発信していくことを積極的に行なっていく上で、他者との関係性の中での自分の立ち位置を確認することを意識したという意見もあった。「Keiwa-signの活動が外へと広がっていくなかで、自分自身の足場を再確認する機会が必要だと思いました。自分のLGBTについての知識や、社会への視線など、もう一度振り返って見なければいけないと感じました。とくにツイッターをはじめめるにあたって、それを強く実感しました」という回答は、社会運動を行う者としての社会への責任についての認識を示すものだと言える。

#### **(4) 友人や学生や知り合いや家族への肯定的な影響**

先にも指摘したが、日常の中でも、明確には意識されないものの、社会運動やアウトリーチ活動を自然に行なっている様子が下記の意見からうかがえる。「LGBTについてすら知らない友人に、サークルの存在、内容について伝える、知ってもらうところからだけでしたが、うれしかったです。友人に「LGBTについてもっと知りたいからおしえて」と言われたのが本当にうれしかったです」、「セクシュアル関係(ママ)に悩んでいた友達の相談に乗ってあげることができた。否定はせず、「ありのままのあなたでいいんだよ」と受け入れることによってその人にも安心感を与えることができた」、「友人らとLGBTについて話す機会も増え、また活動を知っている家族からもLGBTについて知りたいと言ってもらえた」といった意見である。日常の活動が、自己肯定感にもつながっているようである。

#### **(5) 友人や学生や知り合いや家族に与えた否定的な影響**

こうした活動への参加によって、参加者が外からの否定的な見解に曝される状況を避けることはやはり難しい。「やっぱり、このサークルに入っていると伝えたら、「ゲイなの」と言われたことに腹が立ちました」という意見が聞かれたが、どの参加者も大なり小なり、同じ経験をしていることが推測される。マイノリティに関わる活動をしている限り、他者からレッテルを貼られることは避けられないことを理解した上で、こうした意見を直接に

耳にした時に、どのように反応すれば良いか、全員で考え共有していくことが課題としてあげられるだろう。

また、活動自体を否定するような次の意見もある。「(知り合い) が同性愛者のことを「ホモ」と揶揄していたことに対し、それはやってはいけないことだと注意したにもかかわらず「ホモはホモだろ」と返され、わかってくれない人間もいるんだなと理解した」。人権問題や差別・偏見に関わる活動に従事している者は、その活動の理由としている問題自体を否定される経験をすることが多い。こうした意見を変えることは容易ではないし、時には不可能でもある。これらの否定的な意見が、活動への動機付けや意欲を減じることにも繋がりがねない。否定的な見解からの影響をどのように取り扱うか、これも課題であると言えよう。

#### (6) Keiwa-sign は、大学にとってどのような存在か

大学にとって Keiwa-sign どのような存在であると認識しているかについては、まず、大学内のセクシュアル・マイノリティ当事者にとって、Keiwa-sign が重要な役割を果たしていることを認識していることを示す回答がいくつかあった。「LGBTのよりどころだったら嬉しいです。大学内にいる LGBT の人にとってアライがいるということを伝えられたと思ったからです」とか、「大学にとってなくてはならない存在だと思います。今年度のアンケート結果からも分かる通り、敬和には LGBT に該当する方が多いです。そんな方達が学校生活を過ごしやすくなるためには Keiwa-sign の存在は大切だと思います」、「LGBT のひとにとって、そっと寄りかかってほっと息をつけるような、そんな存在だと思うし、そんな存在になりたいと思う」、「敬和大学にとって、欠かせない存在だと思っています。私はこの団体に救われたと感じております。また、これから入学するかもしれない LGBT の学生の居場所となってほしいと考えているからです」というような回答が、それにあたる。

また、他方で、Keiwa-sign の活動を通して、他者の意識を変えるように働きかけることを自覚していることを示す回答もある。たとえば、「これからの社会で誰もが偏見なく暮らしていくために重要な存在。性の多様性について世間が気づき始めたから」というものである。Keiwa-sign が自己肯定を促す存在だとする以下のような回答もあった。「個性の大切さに気づける存在。サークル内で勉強していたり話し合ったりする度に思う。「私は私のままで良いんだ」と」。最後の回答は、Keiwa-sign が自分にとってどのような存在かということの間接的に示すものでもあるだろう。

## (7) Keiwa-sign は、自分にとってどのような存在か

Keiwa-sign が自分にとってどのような場所かという問いに対しては、当然のことながら、LGBT について勉強ができる場所であるという認識がまずある。「LGBT を知れるところ、私はまだ LGBT について知識不足だと思いますが、Keiwa-sign を通じてもっと知りたいです。」

また、落ち着く居場所として、あるいは、安心して話ができる場所として認識されていることがわかる。「性の多様性を広い心で受け入れてくれるところは、へなへなした私にとって、気持ち良く話ができる場、存在です」、「落ち着く存在だと思います。自分と違うからといって、いじめられたり仲間はずれにされたりすることを過去に経験しているので、少し無理をしても周りに合わせて生活をするのが今までありとてつらかったです。でも、Keiwa-sign は一人一人の個性を尊重し、受け入れてくれる温かい場所だと思っています」、または、「大切な居場所です。Keiwa-sign に入らなければ話すことのなかったメンバーたちとも出会い、自分一人だけでないことが分かるからです」という回答があった。

自分の考えを問い直したり見つめ直したり、自分の有り様、行く末を問うたりする機会を与える場所であるとも認識されている。「他人とのつきあい方を考えさせてくれる存在」「個性の大切さを実感できる場所。先程も記した通り、サークル内での勉強会等を通して様々な人がその人たちなりに一生懸命生きていることがわかる」、「すごく居心地がよく、わたしの中にまだまだたくさんある凝り固まった考え方をいつも一つずつほぐしてくれる存在である。「男」「女」二つだけの窮屈な性別から、「自分」「私という個人」を解放してくれる、そんな場所である」、「時折立ち返って、自分の立ち位置を確認する場所のような気がしています。わたしにとって Keiwa-sign での経験はなににも代えがたいものです。Keiwa-sign で知ったこと、やってきたことを振り返りながら、今、そしてこれからどう行動するかを考えています」というような回答である。

## 5 活動を通したメンバーの道徳的成長と今後の活動指針

Keiwa-sign の活動を通して、メンバーが得た最も意義ある実践的な知の一つは、LGBT、すなわち、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーとして示される言葉に表現され得ない、深くニュアンスのある「LGBT」理解であろう。「女」か「男」か、「同性愛」か「異性愛」かといったような、二項の対立概念から成立する一般的な理解を越えて、対立概念では捉えきれないニュアンスのあるセクシュアリティやジェンダーについての理解を得た。実際、敬和祭での Keiwa-sign の展示についての反省会では、学生メンバーから、Keiwa-sign が展示での表現の中でカテゴリーにとらわれていたことについて、意見があった。展示で「同性愛」を強調しすぎるあまり、トランスジェンダーと

いったジェンダーのカテゴリーを超越する人たちを忘れ去ってしまったというものだ。

これらの活動や振り返りを経て、Keiwa-sign メンバーが得たニュアンスのある「LGBT」理解は、今後の方向性を指し示すものでもある。活動を展開していくにあたり、アウトリーチ活動での人々への分かり易さを求めると、どうしても単純なカテゴリー理解にとらわれてしまう。人のあり方は二択や三択で捉えきれないことを、日々の活動の中で、気づきとして持っているということは、他者理解の際の重要な倫理的リソースとなる。「わかりやすさ」、「アウトリーチ活動の展開」と、「個々人についてのニュアンスのある理解」の間で省察しながら行動することは、今後の大きな課題であり、また、Keiwa-sign の活動の指針でもありと言えよう。

## おわりに

環境に埋め込まれた問題を明らかにし、研究活動を通して環境に働きかけ、獲得した実践知を環境に還元していくというアクション・リサーチの手法は、確かに、Keiwa-sign 参加者の道徳的変容を促したようである。自己を肯定し、他者に働きかけ、最終的には社会変革を求めるといような内的変容のプロセスは、例えば、パウロ・フレイレがブラジル農村社会でおこなった識字運動の過程で理論化した「意識化」にもみられるプロセスである<sup>10)</sup>。「意識化」とは「自分たちが投げ込まれている世界についての対話」とおして、「間合いを置いて世界をみつめ、それに向かって問を発し、さまざまな考えをお互いに出し合いながら、考察を深め、問題解決のための行動を模索する」実践である<sup>11)</sup>。フレイレの「意識化」をめぐる議論は、アクション・リサーチの理論的支柱となっているが、Keiwa-sign の活動は、まさに「意識化」のプロセスだと言える。

2015年の立ち上げの時点で、活動はグループの中だけに限られており、大学共同体全体に影響を及ぼすものにはなり得ていなかった。そういったゲッター化、すなわちマイノリティとして全体から隔絶されていくというリスクもあったが、アクション・リサーチの手法をとったことで、メンバーの道徳的成長を促し、また、研究報告のアンケート調査にも示されたように、大学環境自体にも少なからぬ影響を与えていることが明らかになった。自己に働きかけ、また社会に働きかける参加者全員の共同事業として、Keiwa-sign の教育的意義を見いだせたと言える。



## 註

- 1) 清水晶子 (2016) 「大学は〈大学〉を守れるのか——大学におけるセクシュアル・マイノリティ」『世界』888、2016年11月号、188-194。一橋大学での事件を受けて、「あらゆる構成員の人権と安全とを保護し、教育、研究及び労働の環境を整えることが大学の責務であることであるならば、大学に求められているのは、現状では部分的にしか果たされていないその責務を十全に果たすべく努めることに過ぎない」と、清水は議論する (194頁)。
- 2) Peter Reason and Hilary Bradbury eds., (2008). *The SAGE Handbook of Action Research Participative Inquiry and Practice*, second edition, p. 4。
- 3) 特定非営利活動法人 ReBit 「ReBit が目指すもの」 <http://rebitlgbt.org/vision> (2018年1月22日閲覧)。
- 4) 特定非営利活動法人 ReBit 「プロジェクト」 <http://rebitlgbt.org/project/education> (2018年1月22日閲覧)。
- 5) FtX トランスジェンダーとは、体の性別は女性であるが、性自認は男女どちらにも特定しないあり方を指す。
- 6) コメントは教職課程を履修する学生によるエッセーから引用している。
- 7) 電通ダイバーシティラボ (2015) 「LGBT 調査 2015」  
<http://www.dentsu.co.jp/news/release/pdf/cms/2015041-0423%2B.pdf> (2018年1月22日閲覧)。
- 8) 日高康晴 (2016) 「LGBT 当事者の意識調査 ～いじめ問題と職場環境等の課題～」によれば、オンライン調査の結果 (回答数 15064 件)、LGBT 当事者の約 6 割が、小・中・高でいじめを経験している。[http://www.health-issue.jp/reach\\_online2016\\_report.pdf](http://www.health-issue.jp/reach_online2016_report.pdf) (2018年1月22日閲覧)。  
また、同じく日高康晴 (2007) ゲイ・バイセクシュアル男性を対象としたオンライン調査の結果 (有効回答数 5731)、全体の 65.9% が自殺を考えたことがあり、自殺未遂は 14% となっている。[http://www.j-msm.com/report/report02/report02\\_all.pdf](http://www.j-msm.com/report/report02/report02_all.pdf) (2018年1月22日閲覧)。
- 9) 「敬和学園大学における LGBT の教育・職場環境アンケート (学生用) 2017」2017年7月実施、敬和学園大学1年生対象、有効回答数 133。  
調査は、1年生必修のキリスト教学の授業の時間の終わりの5分を借りて行った。調査票を配布する前に、本調査が、LGBT にとって大学がどのような環境だと考えられるかについての大学構成員の意識を知ることが目的としていること、個人が特定可能な情報を記入する箇所はないこと、選択式のアンケートであること、当事者もそうでない人も回答できること、名前は絶対書かないこと、調査の分析結果は、報告書などに掲載することを読み上げた。また、回答するかどうかは自由であることを述べ、協力をお願いした。
- 10) 里見実 (2010) 『パウロ・フレイレ「被抑圧者の教育学」を読む』太郎次郎社エディタス、193頁。
- 11) 同、23頁。

別添 質問票

1 あなたの学年をお答えください	1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 4. その他
2 あなたが現在自認している性別をお答えください	1. 女性 2. 男性 3. X ジェンダー・中性 4. その他
3 あなたが出生時に戸籍や出生届に記載された性別をお答えください	1. 女性 2. 男性
4 あなたは大学で、どの性別として生活しているか、お答えください	1. 女性 2. 男性 3. X ジェンダー・中性 4. その他
5 あなたが好きになる相手の性別について、お答えください	1. 女性 2. 男性 3. 両性（女性、男性） 4. 相手の性別は問わない 5. 該当なし（特定の人を好きにならない） 6. その他
6 あなたは、自認している性別について悩んだことがありますか	1. はい 2. いいえ
7 あなたは、異性が好きなのか、同性が好きなのか、悩んだことがありますか	1. はい 2. いいえ
8 これまでに、性的マイノリティという言葉聞いたことがありますか	1. はい 2. いいえ
9 これまでに、LGBTという言葉聞いたことがありますか	1. はい 2. いいえ
10 性的マイノリティという言葉の意味を知っていますか	1. はい 2. いいえ
11 LGBTという言葉の意味を知っていますか	1. はい 2. いいえ
12 同性愛について自分は理解があると思いますか	1. ある 2. どちらかといえばある

	<p>3. どちらかといえばない</p> <p>4. ない</p>
13 性同一性障害について自分は理解があると思いますか	<p>1. ある</p> <p>2. どちらかといえばある</p> <p>3. どちらかといえばない</p> <p>4. ない</p>
14 同性愛について授業で学びたいと思いますか	<p>1. はい 2. いいえ 3. わからない</p>
15 性同一性障害について授業で学びたいと思いますか	<p>1. はい 2. いいえ 3. わからない</p>
16 これまで同じ学校（小中高大）に、同性愛と思われる人がいましたか	<p>1. はい 2. いいえ 3. わからない</p>
17 これまで同じ学校（小中高大）に、性同一性障害と思われる人がいましたか	<p>1. はい 2. いいえ 3. わからない</p>
18 あなたの大学は、ダイバーシティ(女性、障がい者、外国人など、多様な人材)に対する理解、取り組みが浸透していると思うか、お答えください	<p>1. そう思う</p> <p>2. ややそう思う</p> <p>3. あまりそう思わない</p> <p>4. そう思わない</p>
19 大学内で性的マイノリティに関する差別的な言動を見聞きしたことがありますか（講義時間、休み時間、部活動・サークル活動の時間などを含みます）	<p>1. よくある</p> <p>2. ときどきある</p> <p>3. あまりない</p> <p>4. まったくない</p>
20 知り合いに同性愛の人がいますか	<p>1. はい 2. いいえ 3. わからない</p>
21 知り合いに性同一性障害の人がいますか	<p>1. はい 2. いいえ 3. わからない</p>
22 同性愛は精神的な病気の一つだと思いますか	<p>1. そう思う</p> <p>2. どちらかといえばそう思う</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>3. どちらかといえばそう思わない</li> <li>4. そう思わない</li> <li>5. わからない</li> </ul>
23 同性愛か異性愛かは本人の選択によるものだと思いますか	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. そう思う</li> <li>2. どちらかといえばそう思う</li> <li>3. どちらかといえばそう思わない</li> <li>4. そう思わない</li> <li>5. わからない</li> </ul>
24 正直な気持ちとして同性愛のことは受け入れられないと思いますか	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 受け入れられない</li> <li>2. 受け入れられる</li> </ul>
25 正直な気持ちとして性同一性障害のことは受け入れられないと思いますか	<ul style="list-style-type: none"> <li>1. 受け入れられない</li> <li>2. 受け入れられる</li> </ul>